

善福寺川をたどって行けば

(東京都)

春の公園。桜が咲き誇り、まるでピンク色のじゅうたんを敷いたようだとよく言う歌の文句であるが、実際に水面に桜の花びらが散り落ちて折り重なる様は、他に例えようのない光景である。夏には生い茂った樹木の間を駆け回り、池の淵から鯉に餌をやる。秋には落ち葉を踏み鳴らし、駆けつけても空いていないブランコの順番を待った。そして冬には、川のそばから池の周りを、白い息を弾ませて走りに走った。私にとって善福寺公園そして善福寺川は、なんでもない遊び場のひとつであり、なんでもない川であった。九つの時から知っているあの場所について、ここに少しだけ振り返る時間ができた。



小学校のころ、私はよく家族で善福寺公園へ行った。父と母とバドミントンをしては、帰りに自動販売機でアイスやジュースを買ってもらったものだった。ボートを借りては鴨にパンの耳をちぎって与え、オールで水を掻いては、鴨にやった餌を横取りする鯉を威嚇した。友達同士で出かけるようになると、川にザリガニを捕まえに行った。皆が捕まえるものだから、学校の水槽の中は、多すぎて名前のないザリガニでいっぱいになった。また、水の温度が高くなって、普段は川の中にいるザリガニが一斉に岩場へ這い上がってきた夏の日のことは、今でも思い出したくはない。「茹で上がった大量のロブスターで地面が真っ赤」だとは、上手く言ったものだ。

高学年になると、一人で自転車に乗って一駅分くらいの道のりを走ることも多くなった。「迷子になったら川を見つけて、川に沿って歩けばいい。そうすれば学校に着くから。」と小学校の担任の先生は言っていた。私の通っていた小学校の敷地には、善福寺川が流れていたからである。フェンスで囲まれていて川べりまで降りていくことは出来なかったが、昔はフェンスや土手もなく、川で遊ぶことが出来たそうだと先生は言っていた。だから私は一人で自転車に乗って友達の家へ行った帰りには、川を見つけては川に沿って帰ってきた。夕暮れ時に犬の糞に気をつけながら、また鴨の親子を見つけたり、うっすら魚が泳いでいる影を眺めたりして、小学校か、その先にある善福寺公園に辿り

着くであろう道を走った。逆の方向へ向かっていけば、間違えなく迷子になるであろうことは予想がついていた。見渡して「緑の塊」のあるほうが公園だ、そう言い聞かせて早く心をなだめたものだった。

中学生、高校生になると、学校のマラソン大会にそなえて川沿いや公園の周りをランニングするようになった。一人で走りこみをするのは好きで、今でも何か悩み事や不安を感じると、長い間世話になったランニングシューズを引っ張り出して家から川べりを通って、公園を何周かする。追い込んで一周のタイムを計ることもあったし、ジョギングをして景色やすれ違う人との会釈や会話を楽しむこともあった。季節と共に姿を変える池や川そしてそれを囲む自然の様子は、本当に、そこにいる人の辛い気持ちも悲しい気持ちも和らげてくれるかのようであった。

インターネットで善福寺公園をキーワードに検索してみると、公園管理や情報サイト以外にも善福寺公園を慕って個人でその様子を紹介している形のサイトがたくさん存在することがわかった。中でも Mahalo5656 さんの管理している「善福寺日記」というブログは見ていてとても嬉しい気持ちになった。善福寺公園で撮影した写真を添え、コメントを掲載、そしてそのブログの閲覧者と意見を交わす。また公園近辺の散策や、オススメスポットの紹介、公園の歴史に触れてみたりと、とにかく善福寺公園を愛して止まない方の日記なのである。ブログの冒頭には「天国に一番近い島ならぬ、天国に一番近い池とこよなく愛す、善福寺公園の四季の移り変りと、気ままな善福寺ライフの日記」という紹介文が掲載されており、数々の写真も美しいものばかりである。私にとってなんでもない遊び場であった場所が映像の形で紹介されており、多くの人に共有されている。これは上池のどこどこで撮った写真だななどと考えながら眺めていると、善福寺公園へランニングに行ったときのような穏やかな気持ちになった。善福寺の自然が近隣の方々に愛され、また多くの人々に安らぎを与え続けていることがわかった。そして私が感じていた温かみをそこにいた多くの人々が共に感じていることを知ることができて嬉しかった。この「善福寺日記」につられて私も善福寺公園へと行ってみることにした、いつものランニングシューズを履いて。

季節柄もう枯れてしまった葦の穂が、水面で風にふかれて弱々しく揺れる。木々が緑色の着物を失くして寂しそうに立ち尽くしているように見える。しかしこれは決して悲しいことではなく、私には植物の内なるエネルギーが暖かくなるまでじっと我慢しているように見えた。気温は低く、ジャージ姿では体を動かしていないと、とてつもなく寒い。それでも公園はジョギングに来ているおじさんや幼い子どもが絶えない。常用樹は緑の葉っぱをまとったまま、寒さの中で池を囲み、池端の葉はまだ赤く、衣替えの最中であるものもあった。また、はっきりとは見えないが、公園そしてその川の中に住む生き物の影、またその川を求めて飛んでくる野鳥の姿を見付けると、東京の真ん中にもこんなに自然はあるのかと、残っているのかと、そう思い嬉しくなる。東京都内に住み続けている私は、身近に公園以外の自然というものに触れないで育った。私にとって公園

は、「緑の塊」だったのである。SEA プログラムで行ったニュージーランドの川と山そして海は壮大で、善福寺の自然なんてごく小さいものであることはやはりわかっていたが、それでも私は自然に恵まれて育ってきたのだと思っていた。善福寺の川とその水源である公園の池は、長い間姿を変えずに私達の生活に恵みを与え続けていたのだと思っていた。しかし実際のところ、近年この公園、池そして川自体が、恵まれていない状態なのだという。

昔は自然に恵まれた豊かな場所であったようだ。友人の母の知人に善福寺の自然保護のボランティアをなさっている方がいらっしゃって、その方から聞いた話をその友人の母が教えて下さった。私がちょうど生まれた頃、20年前の善福寺の様子は今とは少し違っていた。今の善福寺公園は三箇所の湧き水が調整されて池へ流され、そしてその池の水が川へと流れ出している。昔はその湧き水からなる浄水池があり、その水がそのまま近隣の家に流れていて、その水はそのままおいしく飲むことができたようだ。今では池の水の汚染が進んでおり、鴨や鯉にやる餌も水質汚染の原因のひとつだようだ。また、池に住む魚や亀は外来種の存在(ブルーギルやかみつき亀)によって脅かされ、古来からの種が減っている。この二点は公園利用者のマナーの低下が原因になっているようだ。それは私にとって、とても悲しいことであった。よかれと思って鴨や鯉に餌をやっていた、子供心に偉いとすら思っていた。それに、家庭でペットとして飼育されていた淡水魚や亀を自然に返してやろうと考えた人が、無意識のうちに池の生態系を崩してしまったのかと思うと、しかもこれらがマナー違反に属する行動であると考えると、とても悲しいのだ。恣意的でなくとも、今になれば道理の理解できるマナー違反である。餌は水中で分解され、有機物として沈殿する。この有機物が過剰に存在することによって水中の有機養分が多くなり、植物性プランクトンなどが異常繁殖する。この状態が進むと有機物が分解されたときに酸素が使われるので、溶存酸素量が少なくなる。すると、水中に生息する魚や水鳥が酸素を摂取出来ずに死に、水は悪臭を放つようになる。外来種は水中の在来種との交雑や、エサや生息域の奪い合いにより在来種を駆逐しかねない。また、善福寺公園は立地として五日市街道と青梅街道の間の窪地にあるため、20年間で車の交通量が大幅に増え、それが原因で大気汚染が進行しているようだ。水質汚染に大気汚染ともなれば、そこに存在する動物にとっても植物にとっても住みよい環境だとは言い難い。

目の前の鴨やペットを何も知らずにただ思うだけでは本当に自然を守ることにはつながらない。その背後に何があり、そしてその結果どんなことが生じてしまうのか、予想しなければ守ることが出来ない、植物も、動物も、それから川も。また昔から地球規模で問題視され続けてきたことではあるが、日常生活の快適さが徐々に身近にある自然を脅かしていることに、私たちは気付かない。いや、気付きたくないのだと思う。ひしひしと失われていくものをどうしてこうも思いやれないのだろうか。歳をとって、教養を身につけて、何故だか知識に憂いを感じることもよりはるかに「無知の知」を思い知

らされることが多い。冒頭でも述べたように、私は善福寺の川と共に日々を過し、健やかに成長してきたつもりでいたのだが、どうやら川の方はとても具合が悪いようである。だが、このようにたくさんの人々に愛されている川であるからこそ、見捨てられることなどないはずだ。今回の学習でボランティアの方にお話を聞く機会を得、そして川の実情を教えていただいて本当に良かった。こうして知識を共有し、一人でも多くの人々が川を思いやることで、川を生きし共に成長していけるのではないだろうか。善福寺川をたどって行けば、皆が“穏やかな気持ち”にたどり着ける。

<参考>

善福寺日記 <<http://mahalo5656.exblog.jp/>> 2005年2月, 2007年12月